

【研究ノート】

農村散策による地域資源探索活動の意義に関する一考察 －長野県小布施町の取り組み事例から－

宮部 和幸*

- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. はじめに－課題と方法－ | (1) 小布施町の概要と地域資源の活用状況 |
| 2. 地域資源探索活動に関する予備的考察 | (2) 地域資源探索活動の取り組み方法 |
| (1) 地域資源の特質と地域資源探索活動 | (3) 地域資源探索活動の取り組み結果 |
| (2) 地域資源探索活動としての農村散策 | |
| 3. 農村散策による地域資源探索活動の取り組み事例 | 4. おわりに－農村散策による地域資源探索活動の意義－ |

1. はじめに－課題と方法－

地域資源とは、地域に固定された活用可能な資源であり、それは、一般に農地、農業用水及び森林等の自然資源、農村文化・歴史や農村景観・町並み等の文化的資源などをいう¹⁾。本来、資源は人の働きかけによって変化し、人という主体が客体である資源をいかに探し出し、活用、拡大するかによって、それ自体の価値は大きく異なる。したがって、地域資源問題を検討する場合、人が地域資源を探し出す「探索過程」、それを配分し利用の適正化を図る「活用過程」、さらにその量的・質的な拡大を図る「拡大過程」があり、これらの各過程における動態的なアプローチ²⁾が重要となる。なかでも出発点である探索過程での地域資源探索活動のあり方が、当該地域に賦存する地域資源の評価を大きく規定する。

その地域資源の探索過程と活動に関する既存研究は、必ずしも充分であるとはいえない。農村計画論、地域活性化論などの分野において、地域資源の探索過程は地域活性化や振興計画の策定のための準備段階として、いわば計画づくりの作業工程として位置づけられているケースが多く、必ずしも探索過程そのものに焦点が当てられているわけではない。

また、近年、これらの研究では、地域住民参画型の計画づくりが強調されてきており、

*当学科准教授（みやべ かずゆき）

Key Words：1）農村散策、2）地域資源、3）探索過程

1）Country Walk、2）Regional Resources、3）Search Process

計画策定のための地域住民の合意形成や計画実践に向けての動機づけに、地域資源探索活動への地域住民参画の意義づけを共通して指摘している³⁾。しかし本来、地域資源探索活動の意義は、こうした計画策定に関わるものに限定されるものではない。地域資源の探索過程と、そこでの探索活動そのものに焦点をあてることによって、新しい意義づけを抽出することができる。

さらに、地域資源探索活動に関しては、たとえば、地域の魅力探しの「ワークショップ」や、地域発見の「地元学」といった活動の手法や実践が紹介されてきている⁴⁾。ただ、これらの多くは、事例報告にすぎないものが少なくなく、しかも紹介される探索活動の手法には、かなり手の込んだものが多く、必ずしも地域住民等が容易に取り組めるようなものではない。

そこで本稿では、以上のような状況を踏まえて、農村地域に賦存する地域資源の探索過程そのものに焦点をあてて、地域住民等が容易に取り組むことが可能な地域資源探索活動の手法としての「農村散策」に着目する。そして、筆者らが参画した長野県小布施町での農村散策による地域資源探索活動を事例として⁵⁾、その手法を提示するとともに、農村散策による地域資源探索活動の意義を明らかにすることを、本稿の課題とした。

なお、本稿の農村散策は、桂〔2〕が提唱している「カントリーウォーク」に依拠している⁶⁾。農村散策による地域資源探索活動とは、地域住民等が散策しながら「農村の自然」、「農業の営み」、「農家の生活」の3つの観点から調べ、散策ルートマップ等を作成するなかで、地域資源を探索するものである。

近年、農村散策は、「農の福祉力」の視角からも⁷⁾、関心を高めている農村レクリエーションである。こうした農村散策と地域資源探索過程を関連づけた先行研究はなく、本稿のこの分野への貢献が期待できよう。

以下、本稿は次の手順によって考察を進める。まず、地域資源探索過程に着目して、地域資源の特質と地域資源探索活動に関する予備的な考察を行う（第2節）。続いて事例としての長野県小布施町の概要と、そこでの筆者が参画した農村散策による地域資源探索活動の取り組みを示す（第3節）。これらを踏まえて、農村散策による地域資源探索活動の意義を明らかにしたい（第4節）。

2. 地域資源探索活動に関する予備的考察

(1) 地域資源の特質と地域資源探索活動

まず、地域資源探索活動の検討に際して、地域資源の特質については既に多くの文献で引用されている永田〔3〕の指摘をみておく。永田は「地域資源は資源の一部であるとは

いえ、やはり一般的な資源概念では説明できない側面をもっていることに注意しなければならない」とした上で、「非移転性」、「有機的連鎖性」、「非市場的性格」という、一般資源と異なる3つの特質を論じている⁸⁾。

「非移転性」とは、その地域の土地（農地）や気候などの地域資源は、地域固有の生態系に位置づけられるものであり、人間による空間的移動が不可能または困難であるとした。「有機的連鎖性」とは、森林と水は有機的連鎖を持っており、その連鎖が破壊されたとき、地域資源の有用性が失われしまうという考え方である。きれいな水だけが存在するのではなく、そこには豊かな森林がある。一つひとつの資源は相互に関連し、ある部分だけを切り取っても、それが地域資源としては成り立ちにくいということを意味している。

「非市場的性格」とは、この「非移転性」と「有機的連鎖性」の特質を有するがゆえに、いわゆる市場において調達が不可能、市場メカニズムには馴染まないものであるとした。このことを取引コスト論で考えてみた場合、地域資源の取引コストは、市場取引よりもむしろ組織的取引の方が節減される可能性が高いことを意味する。すなわち、地域資源は、何らかの組織的取引を基本とする取引形態が採択されるのである。

したがって、このような特質をもつ地域資源探索活動の要件としては、1つに、地域資源の非運搬性の特質によって当該地域における地域探索活動を基本とすることである。

2つに、地域資源の有機的連鎖性を鑑みれば、探索活動の対象は、おのずと多様な地域資源となる。多様な地域資源とは、自然資源、文化的資源などの資源領域や範囲の多様性、有形、無形資源という資源形態の多様性を有することを意味する。また、たとえこれら多様な地域資源のなかから、特定の資源を抽出したとしても、その抽出された資源が、他の資源との連鎖性を有していることへの考察を不可欠とする。すなわち、有機的連鎖性に基づく総合的な地域資源検索活動が必要であり、その活動を可能とする手法が要請されるのである。

3つに、第一の要件とも関連しつつ、日頃から地域を熟知している地域住民等の参画による組織的な地域資源探索活動が必要となることである。組織的な地域資源探索活動は、地域資源の組織的取引を基本とすることによって探索コストの低減がもたらされ、このことが地域資源探索過程における重要な意義として指摘できるのである。したがって、地域資源探索活動の手法には、地域住民等が参画し、取り組みの容易性の確保が求められる。

(2) 地域資源探索活動としての農村散策

桂〔2〕の提唱する農村散策の歩き方は⁹⁾、歩く速さや距離を競うものではなく、少人数で静かに歩き農村の風情にゆったりと浸るものであり、農村散策しながら「農村の自然」、

「農業の営み」、「農家の生活」に興味を抱き、自分自身で楽しみを発見するものであるとした¹⁰⁾。一方、農村散策を受け入れる地域では、ふるさとの自然と文化を見つめ直す機会が得られ、それによって農村を一層風情のあるものに展開できるものであるとした¹¹⁾。

1990年以降、わが国においてグリーンツーリズムに対する関心が高まり、多くの農村地域において具体的な取り組みがみられるようになってきた。しかし、ややもすれば農村地域を観光事業の場として、交流人口の増加などをねらった施設依存型のグリーンツーリズムを展開している事例が少なくない。

桂が提唱する農村散策は、施設依存型のグリーンツーリズムにみられるような農村地域の何かを楽しむための場所として位置づけるのではなく、農村それ自体を楽しみの対象とするもの、すなわち、豊かな自然のもとで、農林業が営まれ、農家の生活が息づく農村地域の楽しみ、レクリエーション (recreation) に着目していることにある。

このような諸点を含意する農村散策によって行われる地域資源探索活動に関して、その特徴を指摘すれば次の諸点をあげることができる。

第1の特徴は、あくまでも農村そのものを楽しむための地域資源探索活動を基本していることである。探索活動が、何らかの施設整備やあるいは計画づくりのために行われるのではなく、農村散策、農村レクリエーションに資するという活動の狙いをもつものである。

第2の特徴は、探索活動の地域資源対象である。それは、「農村の自然」、「農業の営み」、「農家の生活」のこれら3つの探索活動の観点にかかわる地域資源を対象とする。

第3の特徴は、地域住民等の参画による地域資源探索活動の手法としても位置づけられることである。それは、農村散策自体が、比較的だれでもが取り組みやすい農村レクリエーションであることに依拠する。

3. 農村散策による地域資源探索活動の取り組み事例

(1) 小布施町の概要と地域資源の活用状況

長野県小布施町は県北東部、長野盆地に位置する総面積が約19km²の県内市町村のなかで最も小さな町である。人口は11,477人、世帯数は3,412戸であり、うち農家人口3,966人（農家人口率35%）、農家戸数は916戸（農家率30%）である。産業別就業者数では、第1次産業1,592人、第2次産業1,865人、第3次産業3,203人となっている¹²⁾。

樹園地が総耕地面積（824ha）の70%を占めているが、山林は5%程度しかなく、比較的平坦な地域である。2005年の農業生産額は28.3億円、リンゴやブドウ、栗を中心とする果樹がその8割近くを占めて最も多く、次いで米、野菜の順となっている。

本町は、室町時代に始まったとされる栗生産で知られ、栗菓子の老舗や栗を使ったメニューのある飲食店が評判である。また、江戸時代には街道筋の町として栄え、豪商たちが葛飾北斎らの文人を招くなど、文化の香り高い雰囲気をついに伝えている。そこで地元商工会が中心となって、こうした歴史的遺産をはじめとする地域資源を活かした景観づくりが進められてきた。その具体的な取り組みの一つが、1982年から始まった町中心部における町並みの改修である。小道を整備し、商店や飲食店、銀行などを切り妻瓦屋根の和風建築で統一することが試みられた。その後、看板のデザインや色彩にも配慮が加えられ、広葉樹を中心とした緑地の整備が進められた。

もう一つ注目される取り組みは、「花のまちづくり」である。「よそおいの花づくり」、「福祉の花づくり」、「産業の花づくり」の3つの花のまちづくりを町の主要施策として位置づけて取り組みが開始された。1992年には、花の庭園施設「フローラルガーデンおぶせ」を開園し、花のまちづくりの拠点施設を整備した。5年後の97年には、農林水産省の花のまちづくり推進事業認可を受けて、花の育苗施設「おぶせフラワーセンター」を開設した。2000年からは、花で飾られた一般家庭や商店、寺院などの庭を公開し、来訪者との交流の輪をひろげる「オープンガーデン」がスタートした。住民と行政が協働で運営するオープンガーデン事業は全国でも初めてで、これらの取り組みが評価を得て、年間120万人もの観光客を呼び込むことにつながってきている。

このように、町の中心部においては、商工会による景観づくりのための地域資源の探索と活用が展開されてきた。一方、周辺地域の農村部においては、その取り組みよりもやや遅れて、複数の農家グループによる地域資源探索活動の取り組みがみられるようになってきた。そのうちの一つである「風の会」の農家グループが、農村散策を柱とした取り組みを展開してきている。

本グループは、1996年に、果樹農家の女性有志が、農家自身が元気になり、農村に新しい風を起こそうとの思いで、「風の会」というグループを立ち上げる。当初はリンゴのピューレなどの加工を試みたが、農作業に追われて3年ほどで断念した。しかし、県外の農家グループとの交流、直売や宅配などへの取り組みを契機に、地域農業、農村を再発見する交流活動として、毎年春と秋にカントリーウォーク、すなわち農村散策に着目した活動を続けている。

(2) 地域資源探索活動の取り組み方法

農村散策を展開する「風の会」メンバーと筆者を含めた外部グループ¹³⁾で、農村散策による地域探索活動の取り組みを実施した。今回の農村散策による地域探索活動では、次

の手法を採用した。

①地域資源探索活動のための組織化（グループづくり）

地域資源探索活動はまず、農村地域に賦存する地域資源に対して、地域住民がどのような価値を見だし、どのような効果を期待しているのかが重要であり、それを踏まえた地域住民を中心とした組織化が重要となる。ただし、地域資源探索のポイントは、地域住民自らが認識し発見される場合もあるが、むしろその地域のことを知らない地域外住民の新たな視点によって発見されることも少なくない。したがって、地域資源探索活動のためのグループ化は、地域住民を中心として、行政やJA関係者、さらに地域外の外部関係者を含めて編成することが重要である。本事例では、風の会メンバーである地域住民とわれわれの外部のグループによって組織化を行った。

②探索対象地域の確定

地域資源探索の対象となる地域を確定し、農村散策としてのおおよそのルートを想定しておく必要がある。農村散策ルートには、田畑、農家の庭先、蔵、住まいなど、後述の探索対象の地域資源を留意したものが想定されなければならない。なお、本事例では、町の中心部からやや離れた農村部である「六川地区」を探索対象地域として実施した。六川地区は、本町のなかでも遺跡や社寺が残る地区であり、リンゴ、ブドウなどの果樹生産が盛んな地区である。

③探索対象の地域資源

農村散策ルートに沿いながら、地域資源を対象とした探索活動を行う。前述したように農村散策は、「農村の自然」、「農業の営み」、「農家の生活」の3つの観点をもつものである。したがって、表1に示すような地域資源の探索対象を想定して実施した。たとえば、「農村の自然」では、川や、動植物、昆虫などであり、「農業の営み」では、畑、ハウス、農機具、集出荷施設などの共同利用施設などがあげられる。「農家の生活」では、農家の生活や信仰にまつわる遺跡や社寺、農家の建築様式などが資源探索の対象になる。

④地域資源の地理的位置づけ

農村散策により、既存の地域資源、特に有形資源が、当該地域のどこに存在するのかを明確化する。地域資源探索結果を地図に整理し、農村散策ルートとの一体化を図る。

事例では、付箋紙カードを用いて、「農村の自然」は青色、「農業の営み」は黄色、「農家の生活」は赤色と、それぞれに記入し、地域資源カードを作成した。地域資源カードには、農村散策の際のヒアリング結果を記述する。同時に、地域資源探索対象の写真を撮ることで、その把握を正確なものにした。

表1 農村散策による地域資源の探索対象

分 類	事 例	付箋紙
農村の自然	川、水路、動植物、 昆虫等	青 色
農業の営み	果樹園、ハウス、農機具、 農作業の様子、農業者の 共同利用施設等	黄 色
農家の生活	地藏、蔵、社寺等	赤 色

⑤地域資源を「農村歴」としての整理

農村散策で得られた地域資源探索結果だけにとどまらず、特に無形の地域資源を中心として、グループで検討を行い、それを「農村歴」として再整理する。本事例では、事前に空白のカレンダーを用意して配布し、記入をしていただいたものを、農村女性に対するヒアリング調査結果を踏まえて整理した。

(3) 地域資源探索活動の取り組み結果

図1は、④で示された地域資源の地理的位置づけを行った結果であり、六川地区での農村散策ルートとその主要な地域資源探索結果を示したものである。「農業の営み」や「農家の生活」にまつわる遺跡や社寺、農家の建築様式など幅広い地域資源を探索対象としている。また、地域住民に対するヒアリング調査結果等を書き込むことで、無形資源についても紹介した。

表2は、3つの観点から六川地区の「農村歴」を整理したものである。食文化や信仰、農法や在来種の作物など、有形、無形の農村文化に注目していることがわかる。たとえば、「農業の営み」にみられる「接ぎ木」や「モモの目ぞろえ会」、さらには「農協の総代会」などは、農業の営みとして極めて重要な地域資源である。

また、「農家の生活」でみられる「やしょうま」（釈迦が亡くなった旧暦2月15日、寺参りをする子どもたちに配られる餅、一般家庭でもつくられる）や、「おやき」（米の代用食、小布施町ではお盆に仏前の供物とされる）などは食文化や信仰といった無形の地域資源である。このように、有形、無形の地域資源については、「農村歴」を整理することによって、各地域資源の有機的な連鎖性を確認することができるとともに、四季の変化を通じて地域資源の動態的な把握も可能となる。

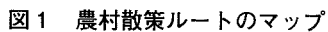


表2 六川地区の「農村歴」でみる農村の地域資源

	農業の営み			農家の生活	農村の自然
	果 樹	水 稻・野 菜	その他・共通		
1 月	モモのせん定開始 ブドウの ビニール被覆	アスパラガスの ビニール被覆		蔵開き（蔵あげ） 安市の開催 ものづくり お日待ち	
2 月	リンゴのせん定開始 果樹のせん定講習会	ハウスキュウリの 収穫	卸売業者との 取引懇談会 果樹部会総会	節分（とろろ汁） 消防団出初め式 干しリンゴ作り 切り干し大根作り	白鳥 モグラの穴 ふきのとう
3 月	果樹の防除開始 果樹の施肥（春肥）	アスパラの収穫 春野菜の種まき	野ネズミ駆除	やしょうま 味噌作り	ふくじゅ草 ウグイス ヨモギ
4 月	果樹の接ぎ木 モモの開花 果樹の摘花・授粉 わら切り・散らし 防霜ファンの稼働	ジャガイモ植え 水田の荒起こし せぎ堀 （水路づくり）	あぜの草刈り 農協総代会の開 催	春祭り（みこし 行列、獅子舞）	つくし 春の七草 山ウド タラの芽 カエル合戦
5 月	リンゴの開花 リンゴ・モモの摘果 ブドウの芽かき・誘 引	肥料の投入 水田の代かき 田植え 春野菜の苗定植 エンドウの収穫			おたまじゃくし
6 月	ブドウの房切・摘粒 モモの仕上げ摘果 クリの開花	タマネギの収穫 イチゴの収穫 キュウリ・ナスの 収穫		節句 フラビ祭り （親睦会）	カッコウ鳥
7 月	モモの袋かけ リンゴの仕上げ摘果 果実選果場の稼働 モモ出荷目ぞろえ会 ブドウの袋かけ	水稻の追肥		夏祭り（盆踊り） うら盆（おやき） スイカ割り	あぶらゼミ カブト虫
8 月	モモの収穫 リンゴ徒長枝切り つがるの収穫 ナシの収穫	夏野菜の苗定植 ハクサイの種まき 白ウリの収穫 玉ネギの種まき	競合産地の視察 研修 防鳥対策	お花市 盆（おやきお供え）	ひぐらしゼミ
9 月	巨峰の収穫 クリの収穫	大根の種まき 野沢菜の種まき		秋祭り （みこし行列）	赤トンボ
10 月	ふじの葉つみ ふじのシルバー シート敷き 中生リンゴの収穫 果樹の施肥（追肥）	水稻の収穫（稲刈り） ライスセンター稼働 水稻のはぎ干し 玉ネギの苗定植		集落の運動会 イナゴ取り	イナゴ 紅葉
11 月	ふじ収穫・販売開始	エンドウの種まき 野菜の冬囲い		えびす講・花火大 会	氷が張る 初雪が降る
12 月	果樹防寒対策開始 りんご苗木植え	ハウスキュウリの 接ぎ木 ハウスイチゴの 収穫	農業機械の整備 ・補修	野沢菜漬け込み 大根漬け込み 収穫慰労の会 除夜の鐘	積雪

注：現地関係者（風の会・農村女性）等に対する聞き取り調査結果より作成

4. おわりにー農村散策による地域資源探索活動の意義ー

以上、本稿では、地域資源探索の過程そのものに着目し、地域資源の特質を踏まえた探索活動のあり方と、農村散策による地域資源探索活動の特徴とその手法について検討してきた。特に、前節の事例の取り組み結果を踏まえて、農村散策による地域資源探索活動の意義を指摘しておこう。

第1は、農村散策による地域資源開発活動は、地域資源の対象の多様性を包摂していることである。探索活動は、「農村の自然」、「農業の営み」、「農家の生活」の3つの観点からなり、これらは、地域資源の領域・範囲とその形態における多様性を含むものである。また、「農村歴」は、四季の変化といったいわば動態的な地域資源探索活動への接近であり、多様な地域資源を月ごとの時間軸で関連づけるものである。すなわち、地域資源の特質である有機的連鎖性としての地域資源探索活動の手法としての意義を指摘することができる。

第2は、農村散策の手軽さ、地域資源探索活動への地域住民等の参画の容易性とそのための組織化の可能性である。事例に示すように、農村散策による地域探索活動は、極めて手軽なものであることが理解できよう。この手軽さが、地域住民にとどまらず、行政、普及センター、JAなどの関係者の参画による組織的な地域資源活動を進めやすくするものとして作用することである。

さらに、農村散策自体は、「農の福祉力」の機能発揮と農業・農村に触れる機会を多く有した老若男女が手軽に取り組める農村レクリエーションである。このことは、地域探索活動への多様な年齢層の地域住民、さらには地域外住民の参画の可能性を高める。

第3は、レクリエーションとして位置づけられる農村散策、そしてそれによる地域資源探索活動は、地域住民自らに楽しみをもたらすものだけでなく、その活動を通じた都市住民等の地域外の多様な人々との交流によって、地域資源の新たな再発見にもつながるとともに、都市農村交流としての意義を有していることである。すなわち、農村レクリエーションとしての農村散策による地域探索活動は、こうした多面的な意義を有するものと考えられるのである。

※本稿は、科学研究費補助金「「農の福祉力」を活用した地域活性化に関する基礎的研究」(研究代表者：福井県立大学大学院・北川太一、2006～2007年度)による成果の一部である。

注

- 1) 広義には、自然資源、文化的資源の他に、家畜糞尿、廃棄農産物などの「リサイクル資源」、農業用水などの「人工施設資源」、「人的資源」などが含まれるが、ここでは、農村地域に賦存する地域資源としての、主に自然資源と文化的資源を考察対象とする。

- 2) 地域資源の過程に対する動態的なアプローチは稲本〔1〕p7による。
- 3) 地域活性化のための計画策定、特に地域住民参加型の計画づくりの手法としては、たとえば目瀬〔4〕のシャトルサーベイ、門間〔5〕のTN法、一筆を基本とした土地利用調査、環境点検地図などがあげられる。
- 4) 「地元学」とは「地元の人が主体となって、地域外の人視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することを第一歩に、外から押し寄せる変化を受け止め、内からの地域の個性に照らし合わせ、自問自答しながら地域独自の生活（文化）を日常的に創り上げていく知的創造行為とする」(『風に開け、土に着け』地元学協会事務局吉本朗著)である。
- 5) 小布施町の農村散策は、「カントリーウォーク」の提唱者である桂瑛一氏と筆者が共同で取り組んできたものである。後述する農村散策マップ、農村歴の作成には筆者と桂氏、さらに調査当時、農村資源開発論研究室の学生であった太田陽介、大瀬真樹、伊藤琢郎の3名が参画した。
- 6) 本稿では、あくまでも農村地域を対象とした地域資源探索活動としたことから、桂〔2〕のカントリーウォークを「農村散策」と表現した。
- 7) 「農の福祉力」とは、その一つは「治癒力」であり、農作業などを通じた訓練や社会復帰支援などの取り組みがあげられる。もう一つは「健康増進力」であり、より健康な生活を送るための体力づくり、農村散策などの諸活動としてとらえることができる。
- 8) 永田〔3〕pp.84～89による。
- 9) 農村散策の歩きについては桂〔2〕pp.27～28による。
- 10) 3つの観点については桂〔2〕pp.33～52による。
- 11) 農村にとっての農村散策は桂〔2〕pp.65～92による。
- 12) 2005年国勢調査、農林業センサスによる。
- 13) 外部グループは、筆者と桂氏、そして農村資源開発論研究室の学生で編成し、2006年から取り組みを進めたものである。

引用文献

- 〔1〕 稲本志良編著『地域農業の活性化戦略を問う』家の光協会、1998年、pp.1～10。
- 〔2〕 桂瑛一『カントリーウォーク』新葉社、1997年。
- 〔3〕 永田恵十郎『地域資源の国民的利用』農山漁村文化協会、1988年。
- 〔4〕 目瀬守男『地域資源管理学』明文書房、1990年、pp.196～207。
- 〔5〕 門間敏幸編著『TN法－村づくり支援システム－実践事例集』農林統計協会、1996年。